

第8章. いま何かが聞こえる

方法序説を道案内にして、何かが聞こえるところまでようやくたどり着きました。その間、デカルトの「哲学原理」、ベーコンの「学問の進歩」、ホッブスの「リヴァイアサン」、ロックの「人間知性論」、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、などの書物の一部を齧ってみたりもしました。

多くのことを考えさせられたのは、ダマシオの脳科学の解説書「デカルトの誤り」を読んだ時でした。この本の凄いところは次のようなことです。

- ・脳科学の成果に基づいて、理性による推論や決断を情動や感情の働きが支えている可能性が高いことを示している。
- ・同様に、心と身体とを切り離して受け止めることが現実味に乏しいことを示し、“デカルトの「心身二元論」”を誤りだと指摘している。
- ・ユングの心理学の根源にあるものを脳科学で説明できそうなレベルまで、言及している。

方法序説の第5部でデカルトは、「私たちの魂が身体に全く依存しない本性であり、身体とともに死すべきではないことが理解される」と言っている一方、「真の人間であるためには、理性的魂が身体と結合し、より緊密に一体となる必要がある」とも言っています。

また、同第6部でも、「精神さえも体質と身体器官の状態とに多分に依存しているため、・・・・・・」とも言っています。

ダマシオがタイトルに使ったのとは違って、デカルトは誤っていたと言うよりも、曖昧だったと言うほうが適切ではないかと思われます。ダマシオの説は脳科学の成果を基盤としており、きわめて精緻なものです。

心が身体反応にどのように依存しているかを説き明かす論理の運びには興奮さえも覚えます。ぼくにとっては、曖昧だったデカルトの考えを科学的に裏付けてくれているのがダマシオの理論だと感じられるのです。

デカルトの「われ惟う、故にわれ在り」という言葉も、自己の存在の基盤を示したのではなく、第5章に述べましたように、理性的魂が主張する自分が自分であること、理由を示したものだとして受け止めるのが適切だと思います。

ダマシオの業績は西欧近代主義から生まれた成果です。しかし、西欧近代主義の地平線の向こうにある何かを感じさせてくれるのです。その感じがぼくの思考の羅針

盤に影響を与えたことに間違いはないようです。

ぼくは、デカルトのある言葉に少なからず抵抗感を抱いていました。その言葉とは、「この実践的な哲学が私たちを言わば自然の主人にして所有者たらしめることができる」というものです。この抵抗感も、西欧近代主義の地平線の向こうにあるものに考えを巡らしてみたいと思う動機の一つでした。

しかし、その抵抗感はデカルトの著書を読み返す中で、またマックス・ウェーバーを齧る中で、次第に薄れていきました。そのことについては、第7章に書いた通りです。

その抵抗感に代ってぼくの中に湧いてきたのは、西欧近代主義の地平線の向うにあるものは西欧近代主義の中から生まれてくるに違いない、という想いでした。ダマシオの所論はそういったことを想像させてくれますし、第7章に書きましたようにデカルトの所論の中にも、その契機を見出すことができます。

歴史を大きな流れで見ますと、ギリシャ・ローマ文明の地平線の向うにあったキリスト教文明はギリシャ・ローマ文明の中から生まれてきました。キリスト教文明の地平線の向うにあった西欧近代主義文明はキリスト教文明の中からルネッサンスを経て生まれてきました。西欧近代主義文明にも同様なことが言えるだろうと考えられるのです。

一時は、西欧近代主義はマルクス主義に取って代られるだろうと思われていました。しかし、マルクス主義は西欧近代主義の地平線の向こうにあるものではなく、西欧近代主義の一変種だったと受け止めることができます。

西欧近代主義の異端児と呼ばれるものが他にもあります。それは、フロイトの精神分析学やユングの心理学です。フロイトやユングの活躍した時代は、マルクスの活躍した時代より50年ほど後です。これが逆だったら面白かったのに、という意見も聞かれます。ぼくもそう思っている一人です。第3章や第4章に示したぼくの文明認識や歴史認識には、そう言った想いも含んでいます。

最近では、西欧近代主義に代るものは東洋思想に基づく新しい文明だとの主張が強くなってきています。しかし、そうはならないでしょう。歴史が示していることは、新文明は旧文明の中から生まれるものであり、旧文明が新文明に置き換えられるのではない、ということだからです。それは、ぼくの文明認識や歴史認識からも言えることです。

そして今、先進諸国も成長諸国も、またこれから成長軌道に乗ろうとしている、例えばアフリカの諸国や中東・北アフリカのイスラム諸国も、西欧近代主義の強い影響の下で前進しています。即ち、西欧近代主義は今、地球全体を覆っていると言う

ことができます。

そういった状況の下で、東洋思想が新文明の誕生に大きな役割を果すであろうことや、イスラムの文明もそれに大きな影響を与えるであろうことは、ぼくの文明認識や歴史認識から見れば当然のことと考えています。

こうしたことを考えながら、方法序説を道案内にして進んできた過程を振り返って見ますと、色々な想いが浮かんできます。その中で最も鮮明に浮かんできたのが次のようなことです。

西欧近代主義の限界も、その限界を超えるための思考と行動の在り方も、デカルト自身が語る中に現れています。その限界とは自然に対する征服者的・支配者的態度です。そして、その限界を超えるための思考と行動とは、デカルト自身がやってきたこと、即ち、全ての存在や現象を感じ取り、それに働きかけ、またその反応を感じ取ることです。そして、このプロセスの中で、デカルト流の合理的思考・演繹的思考をフルに働かせることです。

デカルトが実験を重んじたのも、仮説・検証思考を提唱したのも、こうしたことを後進に実践して欲しかったからです。デカルトは「われ惟う、故にわれ在り」を、自分が自分であることの理由として据えましたが、その思考と行動は「われ交感す、故にわれ在り」に裏打ちされていたと言えるのです。

西欧近代主義の原点とも言える「方法序説」に長い間つきあうことから得られたことは、以上のようなことです。

伝統的無意識としての内的沈澱は相当なものになっているはずですが、そして、内的沈澱の外的具象化によって起る西欧近代主義を超える動きは、既に始まっているはずですが、それが歴史の上で見えるようになるのは何時のことでしょうか。100年後、200年後、それともさらに先なのでしょうか。不可能なこととは知りながら、見てみたいと思う気持と付き合いながら過ごす日々が続いています。